

「……の……ぞろぞろ！」
「TOPレインの真ん中でリヴェンはチヨガスの口の中にいた。なんとか脱出しようとしてリヴェンは必死でもがく。上半身は口の中で固定されており殆ど動かないが、お尻と足だけは動かすことは出来た。」

チヨガスはというとすぐに呑み込んだらもつたいないと思う半分、ギリギリのHEALTHで抵抗するリヴェンをなかなか呑み込めずにいた。AAを一発でも入れておけばと考えている内に、リバーからエズリアルが歩いてきた。

「なかなかいい眺めだな！チヨガス、手伝おうか？」

「丁度いい……少し大人ひくさせてやってくへ……」
リヴェンの躰でふがふがと喋りにくそうに返事をする。エズリアルは尻をふりふりする
リヴェンまで歩いてくると、お尻を揉み始めた。

「なかなかいい尻だな！流石に鍛えてるだけある」
外から聞こえてくる呑気な声にリヴェンは怒りを覚えた。

「……ふざけっ……なっ……」
「まあまあ、そんな怒るなっ」

エズリアルは冷ややかに宥めながら、リヴェンの股間部分を破り始める。





モキッ♡

ブルブル

ドキ

ムキッ♡

キッ♡

じり

ベリ

ビクビク
ビクビク
ビクビク

ニキッ♡

ビク

びく

バクバク
バクバク

ビク

ビク

ビク

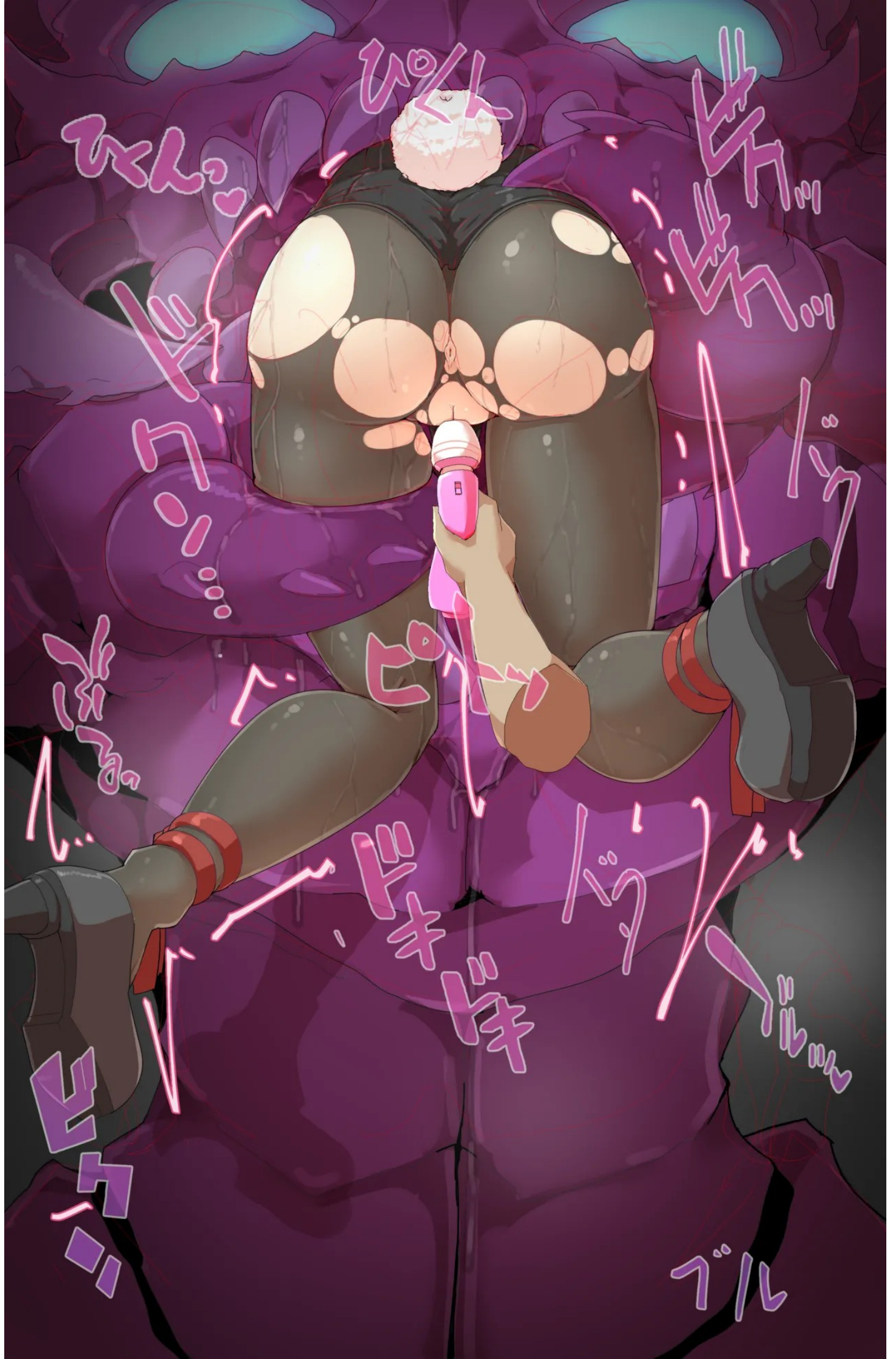
ビク

ん

ん

ビク

ビク



ひん

ひん

ひん

ひん

ひん

ひん

ひん

ひん

ひん

ひん

ひん

ひん

「痛いようにはしれないから、安心してくれよ」
エズリアルはガンドレットを使ってバイブレーターを精製すると、目の前の破られたパニーの股間に押し当てた。


「……………」

状況が理解できないリヴェンは困惑する。

「……………」







「ひいっ……♡♡♡ひいっ……♡♡♡ひいっ……♡♡♡」
「……そんなに悦んでももらえるなんて、俺も嬉しいぜ」
パイプを離れたにも関わらずいき続けるリヴェンを見て、少し笑いながらエズリアルは言う。

しばらくの間股間から体液を吹き出しつつつげると、リヴェンの下半身の力が抜けつつぽっていた足がだらりと下がる。

「……………♡♡はあ……………♡♡あ……………♡♡♡♡」

潮吹きが終わったかとおもうと、股間からじよぼじよぼと別の液体を漏らしはじめた。

「あゝあ、少しやりすぎたか？にしてもこのまま呑まれるのももつたいないな！」

股間をびくつかせながら失禁するリヴェンをみてエズリアルは笑う。

「よし！最近やってないし、ちよつと借りるぞ！」





エズリアルは手早く下半身の服を脱ぎ、ピンピンになった一物を露呈させた。
おしっこを出し切ったリヴェンの股間に押し当て、一気に挿入する。

「あつ……♡いっいっ……♡♡♡」
内側を激しく掻き回され、リヴェンは朦朧とした意識の中ただ喘ぐだけであった。





やんぱんぱん

へへ

へへ

♡

♡

んんん

んんん

♡

んん

んん

んん
とろ
お...

んん

「ふう、なかなか良かったぜ」
エズリアルは股間から引き抜くと、中に入り切らなかつた精液が溢れてくる。「仕事終えた
エズリアルは精液を垂れ流しているリヴェンには見向きもせず服を着ると、そろそろとMIDI
ーンに帰っていった。

残されたリヴェンはゆっくりとチヨガスの中に吞まれていくのであった。

